

令和 8 年度 岩手県立花巻北高等学校第 2 回学校運営協議会 議事録

1. 開催概要

項 目	内 容
開催日時	令和 8 年 8 月 23 日（日） 12:45～14:10
会 場	岩手県立花巻北高等学校 中会議室
出席者 (委員)	青山慶（岩手大学准教授）、伊藤達也（株式会社伊藤工作所代表取締役社長）、菊池剛史（PTA 会長）、阪本泰光（岩手医科大学教授）、佐々木晋（花巻市立花巻北中学校校長）、佐々木裕（富士大学教授）、上田穰（桜雲同窓会会長）、三國卓郎（和同産業株式会社代表取締役社長）、田村篤史（岩手県立大学准教授）、富手京子（花巻市地域婦人団体協議会理事）
出席者 (学校側)	和田健利（校長）、三上浩永（副校長）、多田容子（事務長）、小笠原祐子（教務主任）、山根智暁（進路指導主事）
欠席者	なし

2. 委員委嘱

同窓会長の交代に伴う委員の変更について報告がなされた。今月 1 日に開催された桜雲同窓会の定期総会において新同窓会長が選出されたことに伴い、新同窓会長の上田穰氏が新たに学校運営協議会委員として就任。同日、会議に先立ち校長室において委嘱状が交付されたことが報告された。

3. 校長あいさつ

総合的な探究の時間「H×ACT」の取組：探究活動はこれからの社会に必要な力となる力を総合的に獲得できる学習活動として、花高の大きな魅力のひとつとなっている。令和 6 年度に岩手医科大学および合同会社スペースバリューと結んだ包括協定に基づき、多大な支援を受けて探究活動の充実を図っている。今後は「DX ハイスクール」の指定校として、データサイエンスの要素も取り入れながら、さらに H×ACT（探究活動）の充実を進めていく方針が示された。

部活動の活躍：この夏、全国大会（インターハイ・全国高等学校総合文化祭等）への出場権を獲得した部は、剣道部、弓道部、テニス部、アーチェリー部、陸上競技部、文芸部、放送部、写真部であった。東北大会においては、テニス部女子団体、陸上競技部、ハンドボール部男女、アーチェリー部女子団体が入賞した。

硬式野球部は夏の岩手大会 2 回戦でシード校と対戦し、磨き上げた技術と気迫あふれるプレーで健闘し、多くの感動を与えた。また、応援団幹部を中心とした全校生徒による一丸となった応援は球場を大いに沸かせ、本校の強い結束力を示した。

3 学年進路：3 学年全員の進路目標達成に向けて、全職員体制で指導に当たっていく。

4. 令和 8 年度 教育活動経過報告

校長および各担当より、今年度前半（第 1 回協議会以降の約 3 ヶ月間）の教育活動、および安全管理対策についての説明が行われた。

・総合的な探究の時間「H×ACT」の取り組み

「ハクトリ（H×ACT TRIP）」：5 月 13 日（水）に 1 学年全員を対象に実施。

「ハクプレ I（H×ACT PRESENTATION I）」：7 月 2 日（木）、2・3 年生の約 160 チーム（1 クラス約 8 チーム、計 20 教室に分散）が探究成果のプレゼンテーション発表を実施。1 年生は参観。

「ハクプレ II」：7 月 22 日（水）、花巻市総合体育館第 3 アリーナにおいて全校生徒を対象に開催。

・ユネスコ国際理解講演会

6月17日（水）、国立天文台水沢 VLBI 観測所長の本間希樹氏を招き、「岩手発 ブラックホール行き 銀河鉄道の旅」と題して全校対象の講演を実施。ブラックホール撮影成功に至る科学への情熱に触れ、生徒の探究心を大きく刺激した。

・生徒活動および進路指導の状況

進路講演会：1 学年が 6 月 2 日（火）、本校 OB である岩舘光氏と大江郁弥氏を招聘し、地元および県外から見た岩手県の魅力やキャリア選択について講演を実施。

2 学年は 6 月 8 日（月）、岩手大学・岩手県立大学・岩手医科大学から講師（本校 OB の医師・医学部助教である高橋学氏を含む）を招き、模擬授業を実施。

3 学年 PTA：6 月 9 日（火）、GPS-Academic や PROG-H の診断結果を活用した「強み」の理解、キャリアナビの活用、入試指導スケジュール等を説明。受験に向けた生徒アンケート（保護者にしてほしいこと・やめてほしいこと）も共有し、家庭でのサポートのあり方を周知した。

・花高宣言の策定報告

再発防止「岩手モデル」に基づいた教職員研修を 7 月に実施。その結果を踏まえ、本校教職員一同の決意として策定した今年度の「花校宣言」について報告。

・自家用車・レンタカー利用時の安全管理対策

全国における部活動遠征・引率中の重大事故を受け、文部科学省および国土交通省が令和 8 年 6 月に公表した「教職員向け 自家用車・レンタカー利用時安全管理チェックシート」（事前確認用・当日確認用）の導入と運用、本校における具体的な方針について校長より説明がなされた。

5. 意見交換および質疑応答（要旨）

(1) 安全管理に伴う教職員・家庭の負担増加とジレンマ

伊藤達也（伊藤工作所代表）：

引率中の事故リスクやチェックシート導入に伴う管理は、生徒の命を守る上で重要である。一方で、教職員への業務負担、運転による疲労から生じる二次的なリスク（疲労運転など）に対して、組織的なマネジメント（健康管理や十分な休息の確保）が必要ではないか。

外部の引率サポーターやプロのドライバーなどの「地域応援者・支援員」を確保し、先生方の直接の運転負担を軽減できる仕組みを構築することも考えられる。

営業自動車の手配増加等に伴い、今年度になって自己負担額が増加したという実態がある。ひとり親世帯もある中、「お金がかかるから遠征に行かせられない、応援できない」といった状況が発生することは避けたい。根本的に負担を軽減するためには、学校単独の対応ではなく、県の補助、または同窓会・地域 OB による財政的・人的な協力による「サポーター体制」の強化を進めていく必要がある。

学校側の見解と今後の方向性：

安全管理の手間は増えたが、確認を徹底していく。教員の負担軽減策として、例えば「県外遠征を減らし、県内遠征へ切り替える」などの提案を行うことも可能だが、これは「高いレベルの相手と試合がしたい」という生徒自身の挑戦意欲や希望と逆行するジレンマを抱えている。

(2) 学校環境整備の課題（トイレ洋式化と LED 化・冷暖房）

富手委員（地域婦人団体協議会代表）：

「ハクプレ I」で発表していた 2 年生のチーム「WCRT」は「学校のトイレを洋式にする」をテーマとしたが、その研究の過程で「花北のトイレは和式が多い、老朽化で衛生的でない」という身近な課題に着目していた。自分たち生徒の力だけでは便器の交換（洋式化）は不可能であるため、結論として「自分たちでできることとして、科学的な手法を用いて汚れを落とし、徹底的に綺麗に保つための工夫」を突き詰めた素晴らしい発表であった。近年の小・中学生は和式便器の使用に慣れておらず、「和式スペースで転んでしまう」「転んで

しまった際、立ち上がり方がわからない」「(怖くて)使えない」といった実態があるようだ。また、学校が地域の「避難所」に指定されている観点や、高齢者や障害者への配慮を含め、早期の洋式化が強く望まれる。

事務長（トイレ洋式化の現状について）：

本校のトイレ個室は全部で 87 箇所存在する。校舎内における洋式化率は約 50%であるが、体育館や部室・合宿所などの洋式化率は約 30%にとどまり、全体平均で 42.5%という水準にある。

校長（トイレ洋式化・照明の LED 化について）：

毎年、校長協会から県に対してトイレ洋式化の要望を提出している。しかし、県は予算的に一気に行うことが難しく、直近では昨年 3 箇所、一昨年 3 箇所洋式化している。今年度については、現時点で洋式化の予算枠は確保されていない。

今後予定されている蛍光灯の製造中止に伴う LED 化の進捗についての質問には、「県の計画に基づき、蛍光灯が使えなくなる前に必ず間に合うよう進めていく」と回答。

富手委員（地域婦人団体協議会代表）：

県内でも新設校との設備格差が大きい。県に対して予算配分のロビー活動をより効果的に行うことや、国レベルでの支援制度、あるいは地域が一丸となって改善をアピールしていく方法が必要ではないかとの意見が出された。

(3) 生徒の適性検査（データ活用）の目的

阪本会長（岩手医科大学教授）：

3 学年 PTA 等の資料に記載されている「GPS-Academic」や「PROG-H」、「キャリアナビ」等のデータは、どのように活用され、進路決定に直接関わっているのか。

進路指導主事：

これらの適性検査は、ペーパーテストの学力だけでは測れない、生徒の論理的思考力、協働性、課題解決力などの「見えない力」を数値化・可視化するものである。絶対的な数値として可否や進路決定に直接的・一律に結びつけるものではなく、担任が生徒の特質や「強み」を客観的に把握し、面談や個別最適な進路決定の参考資料として活用している。

(4) ローカル AI（LLM）の導入による教員の事務軽減

田村委員（岩手県立大学准教授）：

先生方の業務多忙を解消するため、大学では外部ネットワークと遮断された「ローカル AI」の導入が模索されている。AI の普及スピードは目覚ましく、現在はより軽量なメモリ・スペックで動作する優秀なローカルモデルが登場している。これらが学校でも使えれば、事務的な作業はかなり軽減できるのではないか。

阪本会長（岩手医科大学教授）：

学校で使える外部 AI（copilot）があるのであればそれを活用して欲しい。

三國委員（和同産業代表）：

本校 OB で IT 企業（スターブリッジ社など）を経営する外部人材を巻き込み、プログラミングやシステム活用のコンサルティングを依頼するなど、OB ネットワークの活用（クラウドファンディング等の予算活用を含む）を視野に入れてもよいのではないか。

(5) 遠征費等の財政難と地域・OB による支援体制（寄付金スキーム）

伊藤達也（伊藤工作所代表）：

剣道部などの強豪部活が「3 年連続で全国大会に進出する」などの素晴らしい成果を上げている一方、遠征費の不足分を OB 会や同窓会、保護者の寄付金だけで補填し続けることが限界に達しつつある。「勝てば勝つほど資金繰りが厳しくなり、来年は今年と同じ程度出せるかわからない。親が子供に『ごめん、行かせてあげられない』と言うような事態は絶対に防がなければならない」という切実な課題を共有。

三國委員（和同産業代表）：

企業側は、学校が何に困っているのかが具体的に見えていないのが現状である。学校から『これを支援してほしい』と明確に発信してもらえれば、寄付金や共同研究などの枠組みを通じて、資金やリソースを提供したい。もっと企業と学校が関わっていくべきという、前向きで心強い支援の姿勢が示された。また、各部活動が、資金的な理由で挑戦を諦めることがないよう、OB や地域企業が参画しやすい支援体制や寄付金の窓口の仕組みなど」を整備することも提案された。

上田委員（桜雲同窓会 会長）：

同窓会としても、学校と連携をとりながら協力していきたい。

(6) 将来的な統合（少子化影響）への見通し

佐々木晋委員（花巻北中学校 校長）：

隣にこれほど勉強にも部活動にも一生懸命取り組む素晴らしいお手本があることは、中学生にとって非常にありがたい。お互いに教育を高めていきたいとの発言があった。

統合についての将来的な見通し：

将来的な少子化の進展や生徒数減少に伴う統廃合の計画について質問があり、学校側からは「現在、県からの具体的な計画として統合の話は出ていない。しかし、0 歳児から 15 歳までの人口動態（少子化）のデータを見れば、統合や規模縮小といった未来が避けられないものであることは十分に認識している」との現状の見通しが示された。

(7) 校歌についての意見・感想

青山委員（岩手大学准教授）、佐々木裕委員（富士大学教授）：

開会前に上映した「校歌」に関する放送部が作成した映像作品（テレビドキュメント部門において最優秀を獲得）を鑑賞した委員より、意見が寄せられた。

「時代ごとの歌い方を生徒自身が調べ上げて作られており、大変素晴らしかった。歌は『生き物』であり、生徒たちが一生懸命歌い継いでいる姿そのものが最も大切である」との感想が共有された。

6. その他

・次回（第 3 回）学校運営協議会の日程

令和 9 年 2 月 15 日（月）15:00～（約 1 時間）を予定